

解消する効果を持ち、水統的なエネルギーの増大をもたらしかもしれない。

以上、怖れについて述べたことは、怒りや羨望のようなその他の否定的感情にもあてはまる。

沈黙によって思い出される

第四の道のグループにおける一般的なルールは、学習者は、グループで行なっていることを部外者に口外することを許されないということである。このルールの一つの機能は、いかにわれわれがお喋りかをわれわれに示すことである。われわれは走り出て、自分たちが学んだわくわくさせるあらゆることをあらゆる人にすぐに喋りたがる。こうしないことに同意することによって、あなたはワークのことを自動的に話し始めないようにするために自分自身を観察する必要性を増したのである。このルールはまた、なぜあなたがワークのことを話したくなるのか、その動機を観察する機会を提供する。秘密厳守という考えはあなたを悩ませ、悪いことのように思われるだろうか？ よろしい。そのことであなたを悩ませるあらゆることを詳しく観察していただきたい。あなたは、自分は違っているという印象を人々に与えようとしているのだろうか？ あなたがしていることを彼らがしていないので、彼らをけなそうとしているのだろうか？ あなたが接触するあらゆる魂を救う必要があると感じているのだろうか？

この秘密厳守というルールのもう一つの機能は、グループのメンバーたちが自分の感情や体験について話すための安全な空間を提供することである。もしあなたのもっとも深い感情が町中に言い触らされると思ったら、あなたはそれらを分かち合う気にはならないだろう。この種の秘密性はほとんど

全ての成長のためのグループで用いられている。

秘密厳守のルールが用いられるのは、真の目的とワークのプロセスについてのあなたの理解が、普通——特にワークを始めばかりの頃は——非常に貧弱だからである。もちろん、その頃が、あらゆる人にワークのことをもつとも話したくなりやすい時期なのである。それを部外者たちに口外しないことによつて、彼ら自身が後でワークに加わりたいたいと思つた場合、彼らがワークから恩恵を受けることを困難にしたり、不可能にさせるかもしれない、ワークについての曲解を与えないですむ。私自身のワークでは、私は学習者たちにグループ内での実践や出来事を一時的に秘密にしておくよう求めた。彼らがワークのなんらかの側面を深く理解したことが確実になり、それが皮相な習得である代りに、彼ら自身の体験的知識になつた時が来たら、その時には、たまたしそれが他の人々の助けになるようなら、彼らに話してもさしつかえないことにした。これには、もちろん、自分が何を本当に知っているかについての相当な自己観察が必要である。

秘密厳守はまた、ほとんどの人々がこれらの観念に関心がないため、有用である。われわれがいかに関心があるか、永続的アイデンティティ、自己意識、真の意志を持つていてほしい。これらの観念への真の願望を伸ばしていない人々に、個人的な体験からそれらを押し付けることは、一般に無駄である。

直接的訓令や問いかけを止めて思い出すための

最後に、ほとんどないことだが、ワークグループの他のメンバーたちがあなたに訓令を発すること

がありうる。「あなたの内的プロセスを観察しなさい!」「目覚めなさい!」「あなた自身と世界の両方に同時に注意を払いなさい!」あるいは、彼らは時々あなたにこう尋ねるかもしれない。「あなたもたまたま今、自己想起していますか?」

そのような訓令や問いかけが通常の社会的操作の一部として無意識的に使われる時は、そこには企みがある。その時には、「あなたは目覚めていますか?」や「目覚めなさい!」は社会的操作の道具になる。もし私があなたに目覚めていますかと尋ねなければならぬなら、優越した立場にいる私は、劣った立場にいるあなたが眠っていることを知覚したにちがいないのである。ワークグループでは、このような直接的訓令や問いかけの手法は教師やより進歩した学習者によってのみ用いられるのが普通である。

それでは、教師の機能(役目)について考察してみることになろう。

教師の必要性

グルジェフは、われわれは合意的トランスの空想にあまりにも夢中になっているので、実質的に学習者より目覚めている教師の援助なしに個人が覚醒への道を大きく前進することはほとんど不可能だと信じていた。目覚めと心理的な理解のレベルが上なので、教師は、学習者が覚醒についての空想に夢中になっている時にそれを見つけ、彼にそうした袋小路や空想の下から抜け出るようにするための特定の技法を与えることができる。眠りこけている人々の世界では適任の教師は滅多にいないから、あなたがそういう教師を見つけたら、非常に幸運である。

教師という考えに対する抵抗

大学で人間性心理学とトランスパーソナル心理学の講座を指導する時、私はグルジェフの思想について二時限を費やす。目覚めるためには教師が必要だという考えは、毎回、学生たちからの強い抵抗を引き起こす。彼らはしばしばあまりにもこの抵抗にとらわれてしまうので、それがグルジェフの他の考えに近づくことを阻止してしまう。

一番目の主要な抵抗源は、アメリカ人としてのわれわれの文化適応である。われわれは、自分たちが筋金入りの個人主義者であり、したいことは何でも自分自身ですることができると信じているのだ。良きアメリカ人として、私はこの気持ちに共感を覚えるし、実際にそう思うことがしばしばある。さらに抵抗はしばしば、学生たちが、たとえ心理的、精神的・靈的な成長のためであっても、誰にも頼りたくないと思うことから起こる。これは特に、ほとんどの単科大学生に顕著な成り行きである。彼らが、両親から独立するという個人的な闘いをおしまいにしていないからである。

三番目の主要な抵抗源は、教師を持たなければたいした進歩は望めないという考えに固有のエリート主義である。再び、われわれのアメリカ的背景は、普通、エリート主義と結びついた物事の自動的な表面的拒絶を生み出す。一流大学の学生として、彼らはエリートの一員であるということを私が彼らに思い出させる時、それは彼らにとって驚きである。彼らがこの国の最良の大学の一つの学生になることを許した学校教育の過程で、彼らは無数の淘汰過程を経てきたのである。そこに在学していることよって、彼らはエリート主義の慣行を支えているのだ。にもかかわらず彼らは、人は成長するために教師を必要とするという考えも、そのような教師にはなかなか恵まれないという考えも、依然

として嫌っている。

四番目の抵抗源は、さまざまなカルトの指導者たちと、彼らが自分は悟った教師だと言いながら人々にしてきたひどいことについての学生たちが持っている知識である。もちろん、そうしたことについて彼らが懸念を抱くことはしごく当然である。多くの人々が、みずから霊的教師と称したり、信奉者からそう呼ばれている。けれども、彼らの何人かは全くのペテン師であり、何人かは狂人であり、何人かは不安定な神経症患者であり、何人かは善意ではあるがしかし力のない、名目上の頭首である。教師の地位を持っているが真の知識が不十分な人は、せいぜいのところ人々の時間を浪費するだけかもしれないが、最悪の場合は、彼らを惑わせ、傷つけるかもしれない。

もう一つの抵抗源は、教師にお金を払うという考えである。霊的なものは愛することや与えることに関わっている以上、霊的なことに関わるあらゆることは無料であるべきなのではないだろうか？ ありうる六番目の抵抗源は、滅多に口にされることはない。もし真の教師とワークをしていたら、彼は、それについてただ話す代りに、あなたを実際に変えてしまうのではないかという危惧である。抵抗しようがしまいが、われわれは社会的動物である。グループでワークし、教師を持つことはとても助けとなり（そして、次章で見られるように、きわめて危険である）。そこで、第四の道の教師が持つ機能（役目）のいくつかを検討してみることにしよう。

模範としての機能（役目）

教師の主要な機能（役目）は、学習者たちにより目覚めているとはどういうことかを示す手本とな

ある。周囲の世界に綿密な注意を払うという学習者たちのワークの一部は、教師を研究し、それによつてより目覚めた人はどんなふうになる、外からはどんなふうに見えるかについてのなんらかの考えを得ることである。どのように彼は自分の身体を使うのだろうか？ どのように立ち、歩き、そして話すのだろうか？ ストレスの下でどのように反応するのだろうか？ どのように他の人々は教師に反応するのだろうか？

ただしこれは、目覚めた人の行動に何か一定の修得しうる仕方があるということではない。事実、目覚めた人は柔軟であり、相違はしばしばかなり微妙ではあるが、合意的トランス状態にいる人よりも行動が予測しにくいであろう。しかしながら、あなた自身を観察し、想起しつつある中で教師の行動を研究することによつて、あなたは、偽りの人格の策謀から機械的に出てくるもの以外の新しい可能性をさまざまな状況において見つける。これが、あなたの人格をさらに研究し、柔軟で、より気づいた機能についての一定の「感触」をつかむ機会を提供してくれる。

理想を言えば、教師とは、完全に目覚めており、あらゆる瞬間に自己想起をし、人間の進化が達しうる最高の段階を示しており、その不変の存在が第四の意識レベルのそれである、そういう誰かである。その時には、彼のあらゆる行動は教訓となり、その単純で自然な存在そのものが教えとなるであろう。理想とはほど遠いこの世界では、そのような教師は稀であり、とりわけあなた自身のワークを始めた頃の頃にそのような存在に出会う確率は、（第二十章で論じられた磁力センターの働きを無視すれば）低い。事実、自分は完璧な教師に恵まれたともしあなたが思っているとするれば、次章で論じられる理由のため、あなたが自分の知覚をひどく歪めてしまっている可能性が高い。

実際は、有用な教師に要求される基本的条件は、自分の許にいる学習者たちのレベルに関して彼が

かなり目覚めていて、発達を遂げているということである。もしあなたの子供に綴り方の家庭教師が必要なら、助けになることができる正しい綴りの書き手がまわりにたくさんいる。国中でもっとも希望のある大学の英語科主任が個人的に家庭教師をすることに同意するまで、ぐずぐずと子供のための助けを求めずにいる必要など少しもない。このように、ほどほどに目覚めた人のほうが、ほぼ完全に眠っている人々にとつてはうってつけの教師かもしれない。ただし、自分自身の精神力学と人格パターンについての教師の理解およびそれらへの支配力が、彼の教えに入り込む由々しい歪曲を避けるほど充分に優れているという条件つきではあるが。

グループワークのアラーム機能について論じた時に注記したように、覚醒のワークに取り組んでいる他の人々のまわりにいることの持つ、ある種の「伝染力」あるいは触媒的效果がある。これは教師の役割にもあてはまる。単に自分の許にいる学習者たちのまわりにおり、そして自分の行動や相互作用において彼らより実質的に目覚めていることによって、教師は、学習者たちの努力と成功を促進することができる一種の「電界効果」を及ぼすのである。

学習者たちを理解する

教師のもう一つの基本的機能は学習者たちを観察し、理解することである。教師は学習者たちに知識を伝え、彼らに刺激を与える点で効果的であることを欲する。効果的であるためには、第四の道の教師は固定した形式を超えなければならない。単に「昔から確立されている」言葉で伝統的な仕方で講義したり、あるいは「常に行われてきた」やり方で実演やエクササイズを行うことは、しばしば多

くの効果を失うことである。個々人はお互いに非常に相違している可能性がある。同じ文化内の人々の合意的トランスの一般的な構造は、世代ごとに大きく変化しうる。あなたの教師やあなたにとって非常に効果的だった表現やエクササイズは、今は何人かの人々には役立つかもされないが、しかし他の人々には全く無効か、あるいは彼らを誤り導きさえするかもしれない。

多くの靈的伝統はこのようにして化石化してしまい、時、場所、および現在それらを用いている人々にもはやそぐわない、硬直した形をとっている。第四の道は人々と条件が適正と判断された時と場所に現われ、そして教えがそこではもはや有効ではありえなくなった時に消えた、とグルジェフは述べた。教えの真髄を修得しなかつた人々がなお残っていて、彼らはしばしば、内奥の核心を理解することなく、教えの外面的な形を保存した。

かくして、教師は絶えず自分の許にいる学習者たちを研究し、何がもっとも役立つかを見きわめるためにさまざまな方法を試してみなければならぬ。グルジェフ自身も確かにこのように実験してみた。もちろん、いくつかの実験は役に立たず、目論まれた結果を生まない。グルジェフの信奉者によって使われた方法のいくつかは、今はそうした時代遅れのものになっている可能性は大いにある。

ちょうど教師が個々の学習者を研究しなければならぬのと同様に、彼はワークグループのことも研究してみなければならぬ。自分と学習者たちとの相互作用は、自己観察と自己想起に資する寡聞気を醸成しているだろうか？ 学習者たち同士の間での相互作用はそれを支えているだろうか？ たとえば、何人かの学習者たちの間にもし一定量の低レベルの怖れがあれば、それが自己観察のための「燃料」を提供してはいないだろうか？ 他方、何人かにとっては怖れが強すぎて、彼らのワークの妨げになっているかもしれない。教師はグループの力学を監視し、調整する必要があるのだ。

動機づけと後押し (motivation)

教師のもう一つの機能(役目)は、学習者たちを動機づけることである。確かに、学習者たちは自分自身を理解し目覚めるべく強く動機づけられて、ワークにやって来る。残念ながら、そのように動機づけられている副人格が、しばしば、ワークになんの関心も持っていないか、あるいはワークを嫌っていたり、成長以外の理由のためにワークを利用しようとさえする他の副人格に取って代わられることがあるであろう。

教師は真の成長への動機づけを強める助けにならなければならない。グルジェフはこれを、ワークに関心のない副人格を犠牲にしてワークに関心のある副人格の強化を助けることと言いつわした。

時々、自己理解において学習者が身動きがとれなくなるような重大な発達段階に至ることがある。知ることへの抵抗やその他の防衛機制が活動的にされ、そのため学習者は彼自身の中の重大な事柄に直面するのを避けたり、これらの事柄に彼が直面するよう強いるかもしれない状況から離れていようとする。教師は学習者の準備ができるまで待つことを選ぶかもしれないが、しかし時には学習者が独力では決して準備ができそうもないように思われることがある。成長に関心のある副人格は、こうした障害を克服できるほど十分に強くはない。けれども教師は、偽りの人格の他の部分からの抵抗にもかかわらず本当に成長することを望んでいる、学習者の内なる一つまたはそれ以上の副人格によって屈われたのである。そこで教師は、抵抗があっても学習者を後押ししなければならぬのだ。

これは細心の注意を要する、時には危険を伴う瞬間である。もし教師が賢明で、学習者のことをよく知っており、問題や抵抗の中身をはっきりと理解しており、そしてある一定の種類の心理的圧力に

よって学習者に障害を乗り越えさせられるかもしれないという適切な考えを抱くなら、たとえそれが痛みを伴うとしても、教師は後押しするであろう。そのような心理的後押しが常に確かで信頼できるかどうかは疑わしい。そこには常に教師の理解が誤っていたり、その後押しが効果的でないばかりか、逆効果となつて、かえつて抵抗を増したり、あるいは後押しに伴う痛みが学習者にとつて激しすぎて、ワークをやり遂げるよりはむしろそれをやめてしまふ危険があるのだ。

後押しすることは危険を伴うが、しかしそれは冒すだけの充分な価値がある。さもなければ、誰かを、おそらく余生をずっと合意的トランスに陥らせたままにしてしまふであろうから——そうグルジェフは考えた。人々が後押しを必要としていると思つた時、彼は彼らに対して非常に手荒にした。誰かに真に成長する機会を与えないよりは、彼を狼狽させ、合意的トランスの基準からすれば永続的な傷を負わせさせえする危険を冒す、および／または学習者としての彼を失うことにいちかばちか賭けてみるほうがむしろ考えたのだ。グルジェフはこのように手荒であつたが、これは、通常の機械的な人間は、人生において人間に可能な最低の機能しか働かさなかつた後、犬のように死んでいくという彼の信念に照らして意味をなす態度である。彼はまた非常に目覚めていて、自分の許にいる学習者たちのことをよく知っていた。私の思うに、彼の後押しが常に正当化されるもの、効果的なものであつたかどうかは、恐らくこれからもわからないであろう。

知識を伝える

次に、普通、教師について考える時最初に論じられること——通常の意味での教えるという教師の

務め——を考察してみることにしよう。提示されるべき観念があり、答えられるべき質問があり、与えられるべき研究課題があり、何を学習者たちが吸収または誤解したかを確かめるためのさまざまな「テスト」がある。しかし、前述の諸々の要因の故に、これらのための完全に固定したカリキュラムというものはありえない。できるだけ効果的に知識を伝えるため、教師は教えをしばしば修正し、実験して、効果を最大化するようにする。

たとえば、ある特定の学習者たちには、彼らが一定の発達レベルに達するまで、ある一定の観念は与えられるべきではない。さもなければ、時期尚早の観念は彼らには意味をなさないか、あるいは誤解され、かえって良くない効果を生ずるであろう。良い教師なら、諸々の観念の「衝撃値」を最大化し、それらの観念が学習者の自動化した思考および感情習慣とぶつかることによって最大の注意を得られるような時に、またそのような形で、それらを提示すべく努めるであろう。

グループワークの基本的な機能をまとめれば、次のようになる。学習者たちに自分自身を観察し想起することを思い起こさせ、そうするための社会的的支持を与え、グループ内の報いのある相互作用の特質によってわれわれの本質（本質）とより高い切望の両者を育み、そして有用な技法、問題、成功を共にすることである。

教師なしの予備的なワークグループを持つことができる。これらの観念について話し合い、自分たちの理解を共にすることに取り組む真摯な学習者たちのグループは、お互いの助けになることができる。そのようなグループでは、できるだけ正直にし、そして単に知的な考慮からではなく、個人的な体験から話すべく努めることが特に大切である。そのような指導者がいないグループは、残念なが

ら、あまり遠くまで進むことはできない。

グループを指導する教師、グルジェフの観念に精通した学習者が利用できる時は、はるかに多くのものが得られる。学習者たちよりも著しく目覚めていることによって、教師は適切な時に有用な観念を与え、目覚めた人の模範の役を果たし、学習者たちが独力では決して踏まないかもしれないステップを踏むよう彼らを動機づけ、後押しすることができる。真に目覚めた教師が利用できる時は……。

グループワークは単純なプロセスではない。貴重であり不可欠なものであるが、それは危険を伴う。本章で、こうした点について検討することにしよう。私がそうする意図は、グループワークからあなたを遠ざけようとするのではなく、潜在的な落とし穴や思いがけない危険に対してあなたの注意を促すことによって、そのプロセスを歪曲されにくいようにすることにある。

第二十二章 ワーク・プロセスにまつわる諸問題

ワーク・プロセスにはいくつかの非常に高い目的がある。すなわち、(1)自己理解を大幅に高めること、(2)心、感情および身体／本能的知性のバランスのとれた発達を促すこと、(3)本質を発達させ、それによって偽りの人格よりはむしろ本質が支配的になるようにすること、(4)覚醒すること、すなわち自己想起の結果としての永続的な高次の意識状態を発達させること、(5)および本書の心理学的範囲を超えたその他の目的である。

しかしながら、ワーク・プロセスは非常に困難な条件下で起こる。学ぶ側では、学習者たちは彼ら自身の合意的意識にはほゞ完全に陥っており、なすべきことについての彼らの理解は不完全で、しばしば危険なほど歪んでおり、そしてその中でわれわれが暮らしている文化的環境は覚醒ではなく、合意的トランスを奨励する。教える側では、「完璧」な教師は見つけるのがかなり困難であり、われわれの現在の状態では、われわれとのワークよりもっと大事なことを彼はしなければならぬかもしれないので、自分自身の欠点を持った現実的な人間がわれわれの教師の役を果たすことになる。彼らは自分自身の問題をワークの場にうっかり持ち込むかもしれない。

その最良の状態では、ワーク・プロセスは、少なくとも何人かの学習者の中に、その高い目的に向けての真の前進をもたらす。その最悪の状態では、ワーク・プロセスは学習者たちが陥っているトランスの深さを増し、学習者たちおよび／または教師の精神病理を増幅させる。これら二つの極端の中

間では、ワーク・プロセスはただ単に効果がないかもしれない。高度な観念が論じられ、それに続いて実践が行われるが、しかし学習者たちになんの真の変化も起こらず、そして全プロセスが単なる暇つぶしの方便にすぎなくなる。この種の足踏み（機械的な行動）は実害は与えないかもしれないが、しかしワークの諸観念が持っている力に対して学習者たちを鈍感にすることによって、もし後で彼らがより効果的なワークの場に入るならいずれ浴するであろう恩恵のチャンスを減じてしまうかもしれない。本章では、覚醒をめざすグループワークの成功の妨げになる問題を考察する。

高次の欲求と低次の欲求の衝突

われわれが皆持っている安全・安心欲求の一つは、安定への欲求である。予想したことしか起きなければ、物事はより安全に思われるのである。そこにはなんの驚きも、なんの変化もない。事実われわれはしばしば、いちかばちかで未知のものに賭けてみるよりはむしろ、長期間（時には一生涯）不愉快なことを我慢するであろう。この保守的な安全欲求は、起こるかもしれない特定の怖れ、あるいは変化と結びついた半ば意識的または無意識的な精神外傷としばしば対になっている。

この安定欲求と変化に対する怖れは、われわれの本質的な好奇心や、われわれの生来の自己実現願望とぶつかる。何であれそこにあるものを、自分がそれを好もうが好むまいが、私が進んで見る気にならないかぎり、いかにして私は自分自身と自分の世界を正確かつ客観的に観察することができるだろうか？ 私が自分の現実を見つめ、その責任を取ろうとしないかぎり、いかにして私は目覚めることができるだろうか？ アブラハム・マズローは、われわれの安全欲求と成長欲求が互いにつつかり合

い、その結果両者は絶えず揺れ動くと述べた。安全欲求が優勢な時は、われわれは成長について話すかもしれないが、しかし実際にはいちかばちかの賭けはせず、自分の心理的防衛を強める。われわれの低次の欲求がほどほどに満たされると、われわれの成長欲求はより強くなり、われわれはいちかばちかの賭けをし、危険を冒して未知のものに挑むであろう。これは一般的な状況であって、絶対的なものではない。時には、われわれの低次の欲求が満たされないことが高次の欲求を活性化する力になることもありうるのである。

この安全欲求と成長欲求のぶつかり合いの故に、第四の道は通常の世界での（常識的な基準で）ほどほどのレベルの成功から始まるとグルジェフは主張したのである。家長や成功した不満家は、絶対的な意味では多くの不完全さや狂気を抱えているが、しかし普通の基準では、生計を維持し、ほどほどに安楽に過ごすという課題をこなしているのである。彼は出発点となる堅固な基盤を持ち、その成功した基盤、低次の欲求の満足が、本質的な好奇心と自己実現願望が現われるのを可能にするのである。

一群の人々が一緒に時を過ごししている時にはいつでも、通常の社会的欲求が満たされる可能性がある。社会的存在として、われわれは他人からの注意を受ける必要がある、他の人々がわれわれを攻撃したり、拒絶したりしないと安心して居る必要がある、そして、より積極的には、友だちを持ち、受け容れられ、所属していると感じる必要がある。こうした欲求がほどほどによく満たされている時、高次の欲求が現われることができる。教師の機能（役目）の一つは、高次の欲求が優勢になれるようにこのほどほどに成功したレベルにいる学習者たちを、ワークグループのために選ぶことである。

理想を言えば、これら通常の社会的欲求の全てはワークグループ状況の外で満たされており、した

がってワーク自体のより高い目的に関わる援助以外のいかなるものもワークの場からは求められないことがよい。これは理想であって、せいぜいそれに近づくように努めることしかできない。なぜなら、われわれは皆、通常の社会的相互作用からは十分な注意と受容を受け取らなかつたことがあり、そのためわれわれは、表向きはなにかより高次のものをめざしているワークの場で、自分が注意と受容を求めていることに気づくのである。事実、これがワークグループの場で起こっている時には、むしろわれわれがそうしていることに気づくほど、充分に自分に気づいていれば、それは非常に貴重な学びの体験になりうる。われわれはこれらの欲求を観察し、通常の社会集団内で学ぶことができるかもしれないよりもっと多く、自分自身の内部でそれらの欲求が厳密にどう働いているかについて学ぶことができるかもしれない。

これらの通常の社会的欲求が強すぎる、および／またはわれわれがそれらを十分に観察あるいは支配することができない時は、ワークグループの真の機能が失われてしまうかもしれない。われわれは外面的にワークの実践を模倣するかもしれないが、しかし内面的にはそれらを歪め続けるのである。たとえば、自己観察または自己想起に取り組んでいる人々が一定の動きのスタイルを持っていることにもしわれわれが気づけば、そうした外面的現れに帰着するかもしれない内面的実践に集中するよりはむしろ、人々がわれわれのことを彼らに似ていると思つてくれ、われわれが受け入れられるように、それらのスタイルを模倣するかもしれない。

ミニ文化としてのワークグループ

一群の人々が多くの時間を一緒に過ごす時はいつでも、彼らがそうするために意識的に持っている理由にかかわらず、彼らの社会的欲求が相互に作用し、彼らの周囲のより大きな集団と文化全体から半ば独立した集団を形成する。かくして、ワークグループは一種のミニ文化であり、それはそれ自体およびそのメンバー、「外部」の世界、さらにはそれ自体の一組の価値と規範についての知覚を発達させる傾向を示すであろう。

グルジェフ流のワークグループは、合意的現実およびわれわれの通常意識状態は一種の眠りないシトランスであるという明白な教えの故に、特にそうしがちである。もちろんあなたは、この言明を疑わずに受け入れるべきではなく、ただ自己観察および世界の観察のための一つの焦点として受け入れるべきである。この考えをただ受け入れるよりはむしろ、吟味すべきなのである。にもかかわらずこの言明は、あなたが普通生活する場合のよすがとして、文化的規範の多くまたは全てを拒絶し、自分にもっと合った新しい規範を考え出すことへの、権威からの暗黙の許可を容易に構成してしまいがちである。

こうしたことは社会的には珍しい。たとえば、スポーツ・クラブ、専門家グループ、名著討論グループ、政党などに加入した場合、一定量の仲間言葉が開発され、そのグループにいる間は世界を特殊な見方で見るようになるかもしれないが、しかしこれらの変化は普通些細なものであり、自文化の全般的な世界観に從属すると予想される。そうでない時は、そのような集団はその文化によって通常「逸脱者」とか「カルト」とか呼ばれる。それに対して、そのような集団は、普通、公然と周囲の文

化を攻撃したり、はつきりと異なった服装をするとか行動するといった手段によって、自分たちの周囲の文化を公然と拒絶する。

グルジェフは、あなたの文化についてのあらゆることを疑うよう求めたが、しかし同時に、あなたの外面的ライフスタイルを大きく変えないほうがいいと示唆した。これは、その中であなたの偽りの人格が形成され維持されるさまざまな状況において注意深くあなた自身を観察するために何年もかけて、変わろうと企てる前にあなたの心の働きの厳密な理解に至る必要があるからである。そのような厳密な理解に至った後でさえ、あなたは自分の人生に明白な外面的変化を起こすかもしれないし、起こさないかもしれないのである。あなたの本質的な目標に因襲的なライフスタイルで適度に近づけるのであれば、非因襲的な行動が生むであろう社会的非難を浴びることは愚かしいであろう。

それでも、全てを疑えという訓戒、あなたが自動的に生活のよすがとしてきたことの多くは間違っているという含意はとてつもない自由を与え、ワークグループにとつての大きな潜在的危険を生み出す。その全ての欠点や狂気にもかかわらず、われわれの文化はわれわれの心理的支持システムの不可欠の部分であり、生活を適度に円滑にしてくれる価値の源泉なのである。

たとえば、われわれは他人に礼儀正しくしなさいと教えられる。それが思慮のない条件づけであろうとなかろうと、それは他者への思いやりという意味深い原則を反映しており、適応を助ける仕方でも社会的行動を規制する。全てを疑えという訓戒は、特定の考えに変換される可能性がある。「私は誰にも礼儀正しくする必要はない。意地悪のままでもいいのだ。それは私の条件づけに逆らう作用をするわけだから、そのほうがずっと正直かもしれないではないか」。

時間制限付きの実験としてなら、礼儀正しさという条件づけられた規範に逆らうことはあなたの成

長にとって非常に貴重なものになりうる。あなたが無礼な振る舞いをする時、内面的、外面的に何が起こるか観察すること、あなたの中に取り起きて来る変化に対する抵抗を観察すること、あなたが他の人々に無礼な振る舞いをしている時に、あなたに対する彼らの拒絶や敵意をあなたがどう扱うかを見とめることは、非常に貴重なものになりうる。もしあなたが礼儀正しくしないでいる真の能力を発達させ、それから他者への思いやりから礼儀正しくすることを意識的に選ぶのであれば、それはきわめて道徳的で意味深い行為である。条件づけられた礼儀正しさは、すでに論じた通り、いかなる道徳的意義も持たない。

けれども、ミニ文化としてのワークグループの状況を思い起こしていただきたい。誰かが自己観察の一部として無礼な振る舞いを実験しているのだが、しかし他の人々がそれを、ワークグループに受け入れられたいがために模倣するということも大いにありうる。無礼な振る舞いが、ワークグループ中に広まっている暗黙の合意に基づいた新たな合意的トランス状態の一部として、自動的な習慣になる可能性がある。無礼な振る舞いが、実験の道具というよりはむしろ、グループの規範になってしまいう可能性があるのだ。ワークの重要な側面が歪曲されてしまい、その効果を失うのである。

もちろん、通常の集団でもこのようなことは起こる。たとえば、ぶつきらほうに、(不愉快なことも)「ありのままを話す」ことがはやる可能性がある。けれども、一般的な社会規範とは異なるグループの規範が累積していくにつれて、グループのメンバーは居心地が悪くなる。彼らは、あまりにも「違つて」しまい、そのために文化的な爪弾きをされる羽目に陥りたくはないのだ。グループのバリエーションは、文化の全体的規範システムによって制限される。しかしながら、ワークグループでは文化的規範の全てが疑問視されるので、こうした制限は当てはまらないかもしれない。少々の逸脱な

らさしつかえないが、しかし一定の明白な制限を超えてはならないと明言する、一組のいかなる強力な基準もないのである。かくして、ワークグループの文化は「正常性」の基準からますます遠ざかり、結局は非常に逸脱的になってしまふ可能性がある。

ワークグループのメンバーがこのことを充分に意識し、それから学ぶ程度まで、社会的拒絶反応から来る結末を責任をもって受け入れること以外のいかなる問題もない。けれども、社会的に受け入れられることへの低次の欲求が真の意識より優勢である程度まで、ワークグループのメンバーは、単に社会的に支配的なものとは異なつた形の合意的トランスを——たとえ彼らがそれを「覚醒」と呼ぶとしても——生み出し、多分、以前よりもっと深くトランスに陥る可能性があるだけである。

教師の主要な役目は、ワークグループが異なつたトランス状態を持つ文化に変じるのを防ぐことである。しかしながら、教師がこれを十分に防ぐほどはつきりと目覚めていなくなつたり、その危険性を十分に認識していなかつたりする可能性がある。とりわけ、次節で論ずるように、教師自身の欠点が正のフィードバック・ループで増幅されてしまふ場合は、その可能性が高い。

正ポジティブのフィードバック・ループ

工学にはフィードバックという非常に有用な概念がある。入力と出力を持つ装置を持つてきて、その出力の一部を入力にフィードバックすると、これが装置の性能に影響を及ぼすのである。一方の端にある入力があつすぐに装置を通過して他方の端の出力まで流れる代りに、流れの一部が回帰してループを形成する——システムが自己フィードし始めるのである。